# 中世宗教思想文献の研究〔三〕—架蔵『輪王灌頂口伝』翻印と解題

阿部泰郎

中世の王権国家体制と深く結び付いた顕密仏教の体系にあって、その結合の究極の位置にある秘法とその儀礼が即位法であり即位灌頂である。この即位法の「因縁」つまり神話として創りだされた物語や説話は、中世芸能や文学の領域にもあらわれ、聖徳太子伝の絵解きや『太平記』の語り、能や舞曲などを媒体として中世社会に汎く流布し、民衆に共有される〝知〟の体系の一部となった[1]。この即位法が、密教の修法儀礼として創出され実修されるのは、院政期初頭、後三条天皇の即位式においてのことと伝えられ、鎌倉初期の慈円『夢想記[2]』には、それを大江匡房の記録に拠るものとして言及するが、実態は明らかでなく、確実な史料上の実修は正応元年（一二八八）伏見天皇の即位式まで降ることになる[3]。この段階は、既にしてその秘儀が定着しており、現実の王権を成立させる為に欠かせない装置として即位灌頂が機能を発揮した消息を証言するものと言ってよい。それは天皇が〝王〟になることを身・口・意の三業において実践する所作（ヴィナヤシス）であり、〝王の身体〟を自ら仏としてテクスト化する行為に他ならない。これを支える法と儀礼のテクストは、何時形成されたのか。たとえばそれを聖教の上で確認しようとするなら、中世顕密仏教の本格的なテクスト体系として十二世紀初頭に成立した仁和寺守覚の御流聖教においては未だ管見に入らない。その周辺に位置する禅覚の『三僧記類聚』に断片的に言及されるに止まるのである。

松本郁代氏の『中世王権と即位灌頂』[4]は、この即位法を中心主題として、中世の真言密教が主体として王権を構想（仮想）するために形成した、いわば〝記号の森〟に分け入り、その言説が表象する王権の象徴的国家像と、その体系が意味するものを読み取ろうとする試みである。その素材かつ検討の対象として、東寺観智院聖教など京都周辺の真言寺院経蔵に伝来する、南北朝から室町期にかけての即位法関係聖教を紹介し分類整理する。この分析が示す基本的な認識は、即位法のテクストが印明を中核とした「即位灌頂」という儀礼の為のテクストであることだ。そこに提示される資料と考察は、重要な成果であるが、中世顕密仏教全体からすれば、限定された法流の一部が抽出されて扱われるに留まっており、その聖教体系中での位置付けも未だよく明らかになっていない。なお遡って鎌倉期とそれ以前の即位法聖教は、先

行研究においても未だよく知られるに至らなかったのである。しかし、それは、中央の顕密大寺院ではなく、むしろ東国の地方拠点寺院の経蔵に伝来していた。計らずも守覚による御流聖教と同じく、金沢称名寺と大須真福寺の聖教中に、それらは見出された。

金沢称名寺に伝来した即位法関係聖教は、早く櫛田良洪氏がその一部について言及していたが[5]、その全貌が西岡芳文氏によって纒（カケル）って紹介・公刊された（金沢文庫特別展図録『陰陽道×密教』[6]）。それは、この展観の主題でもある陰陽道の式占祭祀に用いられる、式盤を以てする「盤法」を採り入れた密教修法としての聖天法と吒枳尼天法の関連聖教を一括して扱うものであるから、即位法のみが対象とされるのではない。だがそれゆえに、却って中世密教儀礼体系の中での即位法の位置が伺える事例紹介でもあった。特に聖天やとりわけ吒枳尼天という「天部」を即位法がその本尊とし、その尊法において修されるものであることは、更に弁財天など他の天部や文殊・如意輪等の別尊法・秘法との関連においても注目される現象である。称名寺聖教中に伝来した即位法関係聖教は、鎌倉中後期に流布していた複数の聖教の組み合わせから成る一群の伝本で、私見によればおよそ四群に分かたれる。これを今、仮に「甲・乙・丙・丁群」と称することにする。甲群は釵阿による手択本の四帖の一結、加えて全文が釵阿自筆になる一帖がある。乙群は秀範手択本だが釵阿による外題を付す一結。丁群は熙允の手択本の一結である。テクストの聿誌的特徴として



注目されるのは、それらの装丁は全て枡型折本で共通することである。表紙外題は打付け書で、本文は表裏を通して書写される分もあり、中世事相聖教の中では最もコンパクトで簡便な体裁といえよう。これらは、全て吒枳尼天すなわち胎蔵界外部の天衆として最下等の鬼女神で人の精魂を喰う奪精鬼を本尊とする、「頓成悉地法」とも称される修法であることが、第一に注目される。

全体を代表するのが、称名寺二世釵阿（～一三三七）の書写（本文は別筆）になる甲群の四帖一具、その包紙に「輪王汀（灌頂）別名高御座作法」と題する。各帖の概容は次の如し（以下各帖は全て外題により示す）。①『吒枳尼（梵字）』は、吒枳尼法の印明を中心に師説と口決問答を含み、末尾に伝授識語を付す。②『即位』は、吒枳尼法による即位法としての印明について注す。④『頓成悉地大事等』（内題「輪王灌頂大事」）は、印を示し、後に問答記において本尊秘観について問答する。このうち②は、真福寺聖教中にも鎌倉末期写本を伝え、この法が当時の東国真言寺院間で一定の享受がさなれていたことを示している。

甲群の③『頓成悉地法事』によれば、この法には、一、通常の吒枳尼祭祀法（浅略）二、普通行法（常途）三、盤法（最極秘密）四輪王灌頂（「御即位ノ時令レ伝タマフ大事ナリ」）の四重の別があるとしており、これは甲群の一結のみならず、他の群についても適用されよう。甲―②『即位最極秘々（内題）』はその第四重に相当し、また甲―④も「輪王灌頂大事」という内題を付し、内容に「盤惣

印（最極ノ大事也）」も含まれることからすれば、三重と四重を兼ねるものであろう。①『吒枳尼法』の奥書は、これを観宿から神護寺の鑒教という平安中期の真言僧が伝えたとされる。次いで伝受識語には、久安二年（一一四六）宗観、仁安元年（一一六六）晴兼、嘉応二年（一一七〇）観西、正治二年（一二〇〇）禅遍の伝受書写識語が示される。十世紀の観宿はともあれ、その伝受記を信ずるなら、既に十二世紀にはこの吒枳尼法は「輪王灌頂」として形成相伝されていたことになる。禅遍は後に宏教と名を改め、広沢の法流のうち西院流を関東に弘め、多数の事相書を著した僧である。更に②『即位』末尾の相承記には、この法を「法性寺殿下」（藤原忠通）が白河院と「知足院殿」（忠実）より伝受し、その仔細を存知する為に覚忠（天台寺門派）に問うたところ東寺の門人に伝えるものであると答えたという旨が記され（真福寺本も同文）、その真偽は措くとしても、院政期に院と摂関および顕密僧によって即位法が伝授ないし取り沙汰されていたとする伝承がその聖教に付属するのである。

この即位法（輪王灌頂）一結の甲群に連なるものとして、外題のみならず本文も全て釵阿筆になる『輪王灌頂口決私』一帖がある。これは真言方を含む天台方の即位法で、これをやはり輪王灌頂として説く口決である。はじめに即位灌頂について「帝王即位儀」の作法から説き、次いで印明作法について十種にわたり順次説いていく。就中、「盤物印」の説を含み、これも盤法と関連するものであり、末に法花四要品の説を挙げて、甲群『即位』と同じく真言と天台を摂した顕密仏教の法としての特質を備えている。また、末尾には智證大師として稲荷（吒枳尼）と熊野権現を同体として「（熊野）三山悉〻吒天也」と明かす。これはその末に「隆弁伝」と注され、鎌倉中期に鶴岡別当として幕府に仕え三井寺長吏となった隆弁僧正の所説と思しく、つまり寺門派の伝えた即位法の口決と思しい。このうち、四要品の注には観音品に付けて「鄭玄菊水」の故事に言及する一節が見え、これは所謂「菊慈童」説話、鎌倉期に天台恵心流で形成された即位法の因縁[6]の存在を示唆するものだろう。

乙群の三帖は、釵阿と同時代に活動した称名寺僧秀範による、盤法を含む甲群と同じ鑒教伝とする真言方の吒枳尼法で、即位法とは称さない。本奥書に建長五年（一二五三）書写識語を掲げる正和三年（一三一四）写本である。その①『頓成悉地祭祀法細素通用』は略次第で祭文を載せる。②『頓成悉地法鑒教』（外題『吒枳尼天供養次第』）はその広次第であり、本奥書に保延二年（一一三六）「或師本」による書写識語と建長五年書写識語を載せる。③『頓成悉地盤法次第鑒教』は、その「盤法」としての次第であり、中心に「封盤」から「解盤」に至る盤法作法を配し、壇図や口伝、問答記を加える。この本奥書には建仁三年（一二〇三）「善一」の伝受識語が掲げられる。これらと一具と思しい秀範写と推定される『別行儀軌』（内題「吒枳尼王邏閲那別行儀軌」）一帖は、

盤法を含む吒枳尼法の典拠となる儀軌形式で「南城青馬寺不空奉　詔訳」に仮託する、恐らくは本朝撰述である。吒枳尼の根本呪以下、印・呪、曼荼羅法そして盤の印明を掲げ、これにより極楽往生すると説く。後半に供養法・相応法・安置本尊法・修行法を説く。本書は、真福寺聖教中にも先述の『即位』と同筆一具の一帖として伝えられる。なお、この『別行儀軌』は乙―②にも引用参照されている。

丙群は、乙群と同じく秀範手択本ながら釵阿の外題を付す天台方の辰狐王（吒枳尼）法としての二帖一具、その②に正和三年に「厳師雑記」を以て「口筆」すという識語があり、その点で乙群と一連の写本と見なせる。①『辰菩薩口伝』（内題「如意宝珠王菩薩口決」）一帖は、安然と智證（円珍）に託した口決として、吒枳尼法と吒枳尼天が法花経二十八品に配当されて解釈される。②『辰菩薩口伝上口決』（内題「辰王口決」）も、「当尊ハ真言法花ノ惣躰也」と、吒枳尼天を顕密の至極を体現する天尊としてその秘伝を説く。なお、これらと一具と思しいのが同じく釵阿外題・秀範筆になる『乙足神供祭文』で、辰狐王本縁というべき祭文本文のみで構成されるが、吒枳尼女天の八大童子が遊行中に大鯰に呑まれ、秦乙足なる翁（すなわち稲荷）に助けられた報恩にその名を称えれば必ず福徳に預かると説く。以上の三帖は天台法花の立場から吒枳尼（辰狐王）法を説くもので、祭文形式の縁起が含まれ、稲荷社の伝承とも通ずることが注意される。



丁群は、釵阿の弟子熈允の手択本で十一帖から成る吒枳尼法の一結である。その中核は①『頓成悉地盤法次第私』で、これは乙―③秀範本『頓成悉地盤法次第鑒教』と共通し、より詳細な広次第である。その本文末尾に「伝聞ク、彼栄西僧正ノ行儀、又以如別行軌…」とあって、台密葉上流の祖師である栄西がこの法を修したと伝えるのは興味深い。また、①に対応する詳細な口伝の集成が②『頓成悉地口伝集』である。その中心は「番（盤）法」を主とした諸作法の口伝であり、また、その一々に対応する口伝の本文や図が、以下独立した一帖となって全体を構成する（③盤法本尊図④天巾（盤）地巾図⑤盤封口伝⑥盤惣呪⑦盤建立最極秘々中書別伝⑧頓成悉地法敬重施深義⑨頓成悉地法口決問答灌頂大事考私相承血脈）更にこの乙群と共通する次第の略本二帖分が確認される。このうち一帖は真福寺聖教中に先述の分と一具同筆で見いだされる。この一結も即位法ないし輪王灌頂を表示しないが、ただ②の口伝集中に如意宝珠印について「最極大事ノ印、輪王灌頂印也」と言及があり、その関連を示している。また、法の因縁として「太宰大弐末成」の福徳成就と、丙群の『秦乙足祭文』に共通した本縁を断片的ながら説く（加えて天王寺の鎮守に吒枳尼天を祀ったという所伝も）ことが含まれており注目される。より興味深いのは、そこにこの法を「隠形法」として修して帝の后を犯したと説く伝承であり、それは『今昔物語集』に収められる不空阿闍梨説話に共通する話柄である。即位法に関して丁群一結は情報に乏しいが、重要なの

は⑨末尾「相承血脈」の示すこの法の相承次第であろう。これは称名寺聖教中で別に紙背文書として伝存する『吒枳尼血脈』（仁平四年（一一五四）澄心本奥書、元亨二年（一三二二）書写）と共通する次第であり、大日如来から不空、珍賀、空海、円賀、更に観宿から鑒教、乗運と併行して「高大夫」すなわち高向公輔つまり湛慶阿闍梨に伝わり、更に日蔵などへ伝わったとする。この湛慶もまた、女犯による破戒が露見して還俗した僧として伝承され、その因縁が『今昔物語集』に物語として収められている（その物語は、宋代の『太平広記』に見える、某家の少女と結婚する定めを占いに告げられた学生が、その少女を害そうとするが危うく命を助かり、結局後にその女と結ばれることになった、という所謂〝定婚店〟譚を用いている）。この、僧であっても免れぬ人の定め、いわゆる〝逃れぬ契り〟の物語は、やがて中世には女犯破戒の伝承を持つ浄蔵についても語られ（『三国伝記』『とはずがたり』）、あるいは賢学という名で道成寺伝承と融合した物語草子（『日高川草紙』）として絵巻化されて室町期には流布していた伝承である。このような伝承を纏う人物の名を吒枳尼法の血脈中に見出すことはきわめて示唆的である。それは、即位法の縁起が摂録の祖としての鎌足をめぐって、吒枳尼の変化身である狐から授かった鎌により入鹿を誅したという物語を説きいだし、それが中世神道の深奥に生み出された神話であった[7]ことと根を同じくする、仏教神話の文脈を秘めているであろう。

これらの即位法ないし輪王灌頂を含む吒枳尼天法の一連の聖教は、それ自体が別尊法として、次第―口決―作法―図像および祭文等の詞章から成る複雑な儀礼テクストとして構成されているが、それらが成り立つため、儀礼を支える根拠としての「儀軌」が備わることが注意される。この『別行儀軌』を含みつつ、右の称名寺聖教における吒枳尼天法の全体のうちから、即位法および輪王灌頂の聖教を抽出した同筆一具四帖の粘葉装聖教を、大須真福寺聖教中に見出すことができる[8]。元亨四年（一三二四）伊賀国井田寺で写された旨を識語に載せる写本の存在は、その流布が鎌倉幕府権力の中枢に近待した釼阿周辺に限らず、広汎に享受されていた消息を伺わせるものである。

『別行儀軌』が示す吒枳尼天法の、盤法を含む修法の典拠テクストの存在は、更により遡った院政期の写本として、仁和寺心蓮院聖教中に『多聞ダ枳尼経』（内題「吒枳尼変現自在経」）保延五年（一一三九）書写奥書をもつ枡型粘葉装一帖を見出すことができる。それは「健陀羅国」の狐の本縁として、貧しい土器作りに釈尊が因縁を説くという設定で、福徳を得る功徳を示す本朝撰述経典である。それは修法に沿った作法を中心とする『別行儀軌』より縁起説を中心とした、本地譚に近いテクストである。

院政期から鎌倉時代にかけて成立し形成されてきた吒枳尼法（および盤法）による即位法の、輪王灌頂という儀礼としての真言秘法の体系について、右の称名寺聖教以上に最も詳細な解説を

施す聖教テクストが、本論文において紹介する架蔵の『輪王灌頂口伝』（枡型列帖装、鎌倉時代末期写本）一帖である。本書は、国王が金輪聖王として即位する時に受ける「代々ノ摂政家ニ習ヒ伝ヘテ行」われる儀式作法としての輪王灌頂について、法を構成する「印真言」を明しその意義を説くテクストである。同様の内容をもつ類本は管見に入らない。全体に句切り点と仮名訓を施して読みを示す仮名交り文体で書かれるのは、擬似的な口語の水準で秘伝が開示される口決だからである。印真言は、一、智法身印―智拳印　二、理法身印―五行惣印／内外五古印　三、統化自在印―如意宝珠印／盤法惣印　四、金剛縛印―月輪印／浄菩提心院／如意珠印　五、非内非外印―阿弥陀最極秘印として示される。冒頭には、輪王灌頂が、大日如来の等流身であり、その所変が文殊であるところの「天尊」（吒枳尼天）について、如来が人間の執着を断つ方便として仮に大貪の形を顕し、世間の栄花の第一たる帝王の位について灌頂の方法を以て説いたものと説く。次いで各印について、それぞれの意義と功徳が明かされる。特に第三の印については、その深義を浅略から深秘、三重から四重を示しつつ、これが天尊の秘呪であることの因縁として、衆生の精魂を食す吒枳尼に対し、人の愁を止めるため仏が業報の尽きた人の死する時に食えと勅し、そのために仏が天尊の威徳を増す秘呪を授けたのに由来するという。この縁起説は称名寺聖教の『輪王灌頂』一結中には見えない、本書にのみ知られるところである。また、第三と第四の印については、問答形式でこの法についての習いや伝授の意義を明かし、そこで根拠となる経軌や論疏とその本文を掲出して解説している。その一部については「折紙」で別途示すとする分もあり、この法の伝受において本書の口伝に加えて各種の位相のテクストが多元的に用いられている様相が推察される。なお、その典拠なる経軌等の一部は、『別行儀軌』を含めて称名寺聖教『輪王灌頂』一結中の『頓成悉地法事』の問答記に引かれる書目と一致している。特に注目すべきは最後の第五、非内非外印についての所説である。これが理智不二の義を表す密教の源底として阿弥陀の最極秘印であり、それは衆生成仏の心蓮である蓮花三昧の境地として殊に秘蔵すべきものと説く。そしてこの法の奥旨が業障深く罪悪深重の衆生を哀れんだ阿弥陀仏の往生へ導く救済であることを明かすに至る。ここに頓成悉地の現世の福徳を吒枳尼天に祈る煩悩の全面的肯定と表面には見える即位法が、悪業の凡夫を極楽へ引摂する浄土教の思想と通底するものであることが示唆されるのである。

中世には、即位法のような密教の秘法に限らず、中世の社会を構成する諸流・諸道が悉く秘伝を形成し、その言説において己の家を成り立たせる。創出される秘伝のテクストはその知の体系として可視化されたシステムである。そこに「口伝」ないし「口決」としてその奥義をその表記や問答体を含め口頭的言説を借りて記述するテクスト生成の運動が要請されてくる。三宝院―御流の形

成において勝賢から守覚への口決伝受のテクスト化に臨んで神祇書が形成され、また同じく顕密仏教が王権と結合する、その接点としての即位法―輪王灌頂が思想として生成されるのに際して口伝というテクストが記述されているのである。こうした営みは、慈円や守覚の如き密教界の頂点に立つ貴種ならずとも、名を匿した顕密学僧たちが為すところであったが、彼らは修法や本尊図像なども新たに創り出し、それらと聖教も併せて一具のテクストとして制作されるものであった。口伝はそのテクスト体系の要となる位置にあったといえよう。

吒枳尼天法としての即位法は、現実の歴史との接点をたしかにもっている。称名寺聖教の血脈や相承次第によれば、その院政期の系譜中に見えるところの覚鑁は、鳥羽院と美福門院の厚い帰依と寄進を受けて高野山上に大伝法院を開き、真言教学の刷新と興隆を企てた仁和寺出身の学侶であったが、その活動と存在については、同時代から「天狗」の影が噂されていた人物でもある（忠実『中外抄』）。門地によらぬ立身と王からの速疾というべき信仰を得たその強烈なカリスマが、そのような認識を喚びおこしたものであろうか。一方で覚鑁自身においても、空海の『十住心論』や『即身成仏義』など御書を講ずる真言談義の聞書である『打聞集』の中に、即位法の縁起説の萌芽というべき説話の断片が語られていることは興味深い事実である。その著『五字九輪秘釈』に真言と浄土教の融合を試みた覚鑁の周辺に、遙かに即位法―輪王灌頂という儀礼の思想の種子が胚胎する可能性も検討されてよいであろう。

（1）阿部「即位法の儀礼と縁起」『創造の世界』93号、小学館、一九九〇年。
（2）赤松俊秀『鎌倉仏教の研究』法蔵館、一九五六年。
阿部「宝珠と王権―中世王権と密教儀礼」『東洋思想16・日本思想Ⅱ』岩波書店、一九八九年。
（3）上川通夫「即位灌頂の成立と展開」初出、一九九二年、『日本中世仏教形成史論』校倉書房、二〇〇七年所収。
（4）法蔵館、二〇〇五年。
（5）『真言密教成立過程の研究』山喜房佛書林、一九六八年、「神祇灌頂の展開」
（6）神奈川県立金沢文庫特別展観図録（西岡芳文編）、二〇〇七年。

『輪王灌頂口伝』書誌　列綴装一帖。表紙外題は押付書で左上に「輪王灌頂口傳」、内題も同じ。料紙は椿紙打紙。原状は、全体に虫損と朽損が劇しく、本紙は全体を近年の粗雑なつくろいの補紙に覆われて原態を損ずる。更にその補紙の上から本文をなぞって補筆を施してある。翻刻ではこの補筆部分を除いて本文を復原してある。法量、縦一六・〇糎、横一五・二糎（補修の際に天地を切り詰めてある）。押界、界高一三・四糎、一行幅二・二糎、半丁六行。各丁の丁合に丁付けの墨書符号を付してある。墨付は全五十九丁、遊紙なし。表紙は本紙共紙であるが外題を含む左側三分の二は縦菱絞渋染紙にて覆う。本文は漢字片仮名交じり文。同筆の墨片仮名訓、返点、連続点、声点を付し、更に朱見出点、句

切点あり。八丁裏と三十三丁表に付箋あり。奥書等の識語なし。鎌倉時代末期から南北朝時代（十四世紀）の書写と推定される。旧蔵および伝承の情報なし。東京古典会『古典籍展観大入札会目録』昭和六十一年および六十三年度版に掲載。

**［翻刻凡例］**

一、底本の丁移りと行取りを再現した。本文の用字も底本に近い正字と通用自体を併用した。但し仏教語等の略字や異体字は通用字体に換え、見や消ちや補入はその指示に随って訂してある。

一、底本に付された朱句切点を生かし「・」として示し、私に句読点を補っていない。割注や付訓、送り仮名等の位置や大小も底本に倣ったが忠実な再現ではない。声点（四声点・清濁）はその位置のまま再現した。

一、底本の破損等で判読不能の箇処はその字数分を空格で以て示した。

一、末尾に底本の状態など翻字注を付した。

# 〔輪王灌頂口傳〕

輪王灌頂口傳

輪王ニ四種アリ・謂ク・金輪

王・銀ー・銅ー・鐵々々也・件ノ

輪王ハ・人壽八万歳已上ノ時ニ

生ス・當時ノ國王ヲハ・彼ノ輪王ニ

准シテ・金輪聖王ト申スナリ・

御即位ノ時キ・此ノ灌頂ヲ

ウケタマフナリ・故ニ此ヲ輪

王灌頂ト云也・四海ノ水ヲ取テ・

頂ニソヽキタテマツル・儀式

作法等有ニ之ー・代々攝政家ニ

ナラヒ傳テヲコナハル

・印真言事

大日ニ理智ノ功德アリ・理ノ

功德ノ・身ニアラハル、方ヲハ・理

法身ト名ク・是レ胎蔵界ノ

中臺也・智ノ功德ノ・身ニア

ラハル、方ヲハ・智法身ト号ス・

是レ金剛界ノ中臺也・但シ

智德ハ無量ナレトモ・卅七種ニ

アラハル・此ヲ卅七尊ト云フ・理

性ハ一切ニ遍テ無邊ナリ・故ニ胎

蔵界ニハ六道等悉ク皆アル

ヘシ・又四種法身アリ・一ハ自

└1ウ

└2ウ

性身・是レ理法身也・二ハ受

用身・是レ智法身也・三ハ反

化身・是レ諸菩薩等也・四ハ

等流身・是レ茶吉尼・遮文

荼・龍鬼等也・此ノ等流身ハ

曼荼羅ノ・外部ニツラナレリ・

然而・マサシク中臺ノ一德ニシ

テ・スコシモ浅深ナカルヘキカ故ニ・

等流身ト名ク・等流ト云ハ

ヒトシクナカルヽ義也・謂ク中

臺ノ大日ノ御身ヨリスコシモ

浅深ナク・平等ニ流出スル

意ナリ・ソレニ取テ此ノ天ハ

正シクハ文殊ノ所反ナリ・文

殊ハ即チ大日ノ智德也・金剛

界ノ・大日ノ智德ノ・文殊トア

ラハル、ヲハ・五字文殊ト名ク・

五智ノ如来ノ・所反ナルカ故ニ・胎

蔵ノ大日ノ智德ノ・文殊トアラ

ハル、ヲハ・八字文殊ト号ス・八

葉ノ九尊ノ所反ナリ・八葉ノ

八尊ハ・大日ノ四智四行ノ・功德ナ

ルカ故ニ・聊モ大日ノ御身ヲヘタ

テサルナリ・凡ソ生死ニ輪廻

スル事・執着ノ因縁ナリ

執着ト云ハ・世間ノ栄花・名

聞ニ染着シテ・出離ノ志・ナ

└3オ

└4オ

└4ウ

キヲ云ナリ・大日如来・コノ

コトヲアハレムテ・文殊師利菩薩ニ

勅シテ・世深ノ執着ヲ断セ

シム・世間ノ榮花ノ第一ハ・帝王ノ

位ナリ・深キ教ノ習ハ・大瞋ヲ

断セシメムカ為ニハ・大瞋ノ形ヲ現シテ

此ヲ治シ・大貪ヲ断セシメムカ為ニハ・

大貪ノ形ヲ示シテ此ヲ治ス・故ニ

輪王ノ榮花ノ・執着ヲ断セシメ

ム為ニ・此ノ輪王灌頂ノ・方法ヲ

説キ給ヘル所ナリ

・智法身印 智拳印也

此ノ印ニアマタノ名アリ・或ハ

菩提最上契ト云フ・契ト云ハ

印也・或ハ毗盧遮那如来無盡

福聚大妙智印ト云フ・此ノ印ノ

功能・ソノ名ニアラハレタリ

真言ノ始ニ𑖀ト云ハ・三身ノ

功德ヲ表ス・此ハ金剛界ノ大日ノ

真言ニ・天尊ノ梵号ヲ加フ

是レ天尊ノ等流身ナル意也

終ニソハカト云ハ・成弁ノ義也・一々

字義・句義等・ミナコト〳〵ク

成就円満スヘキ義也

・理法身印 五行惣印也

或ハ列五古ナリ・謂ク五行ト

云ハ・外器外境等ノ・イロナ

└5オ

└5ウ

└6ウ

└6オ

└7オ

ルカ故ニ・外五古ニ表示ス・或ハ
内五古ナリ・謂ク内證ノ五智ヲ
表ス・内外ノ五古・共ニ用ル
ヘシ・或ハ外ハ・非情成佛ノ
義ヲアラワス・非情草木ミ
ナ五智ヲアラワシテ・成仏スヘ
キ意也・内ハ凡夫ノ身ニ五
智ヲ具シテ・内證ハ仏ニ同キ
義ヲアラハス・是レ胎蔵ノ教
門也
真言ノ[illegible]ノ句ハ
胎ノ大日ノ真言也・自余ノコトハ
前ニ准シテ知ヌヘシ

└8オ

[貼紙]
自余前ニ准シテ可知トハ
是モ天尊梵号ヲ可知歟

・統化自在ノ印
此ノ印ニハ・如意自在ノ功能
アリ・輪王ニハ七寶アルヘシ・コ
ノ印ヲハ・四重ニムスフ・第四重ノ
時キ・合掌シテ上ヘムケテ・二中
指ヲヒラク・是レ如意寶珠ノ
七珍万寶ヲ・フラスクチナリ・
印相ニ寶珠ヲ・ムスヒアラハ
ス・此ノ寶珠ノ功能ハ・佛徳ノ
自在ナルコトヲ表ス・佛徳ヲア
ラハスコトハ・必ス十波羅密ノ・

└9オ

円満シ具足シテ・アラハスヘキ
カ故ニ・初重ニハ・右ノ掌ヲ開テ
左ノ肩ニオホフ・右ノ五指ヲハ・
檀ハラ密・戒々々々・忍辱々々々・
精進々々々・禅々々々・小指ヨリ次
第ニアツ・左ノ肩ニニナフ義也・
第二重ニ・左ノ掌ヲ開テ・右ノ
肩ニオホフ・左ノ五指ヲハ・恵
ハラ密・方便々々々・願々々々・力
々々々・智々々々・小指ヨリ次第ニアツ・
右ノ肩ニニナフ義也・十波羅
密ニ・一切ノ功徳オサマレリ・此ヲ
左右ノ肩ニニナヘハ・一切ノ功徳ヲ・
身ニ成就円満スルナリ・十指ヲ
十波羅密ニ・アツルコトハ・秘蔵記ニ
見タリ・ソノ文・カノ折紙ニノ
セタリ・波羅密ト云ハ・天竺ノ
詞ナリ・唐土ニハ・到彼岸ト云フ
生死ノ大海ヲワタリテ・菩
提ノ彼岸ニイタルヘキ義
ナリ・身ニ十波羅密ヲ・成就
スルカ故ニ・浅略深秘ノ・二利益
アルヘシ・先 浅略ノ利益ト云ハ・
十悪ノ業障ヲ滅シテ・十善ノ
帝位ニイタルヘシ・次ニ深秘ノ
利益ト云ハ・理智不二ノ・大日
ノ位ヲ證スヘキナリ・第三ニ

└10ウ

└11オ

左右ノウテヲ交テ・右ヲ上ニテ
下ヘムケテ・合掌形ストモコトハ・
此モ浅深ノ表示アリ・浅ノ
表示ト云ハ・已ニ帝位ニイタ
リ了テ・天下ノ万民ヲ・化
スヘキ義ナリ・深ノ表示ト
云ハ・理智不二ノ大日・普門下
化ノ意ナリ・此ノ第三重ノ
時ハ・[illegible]ノ真
言ヲ用ル・件ノ真言ハ・天尊ノ
威徳ヲマシ・自在ヲエタマヘル
秘咒ナリ・ソノ因縁ハ・此ノ天
モトヨリ・一切衆生ノ・タマシ
ヒヲ取テ食トシタマフ・神力ヲ
以テ此ヲ取テ・他物ヲ以テ・ソノ
カハリニヲク・ソノ人・カノ他物ヲ
タマシヒトシテ・六ケ月イケリ
此ノ事・一切衆生ノ為ニ・大ナル
愁タリ・コノユヘニ・佛・コノ天
ヲ召テ・コノコトヲ・トムヘキ
ヨシ・勅シタマフニ・天マウシタ
マハク・コノコトヲトヽメラレハ・何
物ヲカ・食トスヘキヤト・マウシタ
マフ間・佛ノタマハク・業報ツ
クル・衆生ノ死セム時キ・ソノタ
マシヒ散セムヲ・食スヘシトノタマ
フ・天マウシタマハク・カノ時ノタマ

└11ウ

└12オ

└12ウ

└13オ

└13ウ

シヒハ・我等コトキハ・受用シ
カタシ・上位ノ天等・キオヒ取ル
カ故ニト・マウシタマフ・ソノ時ニ・仏・
コノ天ノ威徳ヲマサムカ為ニ・此ノ
秘咒ヲ説テ・サツケタマヘリ・
件ノ真言ニ・[illegible]ト云ハ・天尊ノ
種子・コレ法曼荼羅身ナリ・
彼ノ字ハ・[illegible]ノ三字ノ
合成セルナリ・[illegible]字ハ・因業
不可得ノ義ナリ・謂ク・悪業ニモ・
サマタケラレズ・速ニ福貴ヲ
エ・小分ノ善因ヲ修シテモ・廣
大ノ榮貴ヲアラハス・不可思
議ノ功能アリ・不可得ノ義ト
云ハ・不可思議ト云意ナリ・[illegible]
字ハ・染浄不可得ノ義ナリ・染ハ
煩悩ノ義・浄ハ菩提ノ意ナリ・
煩悩ヲ断セサレトモ・自然ニ煩
悩ニ繫縛セラレズ・又生死ノ中ニ在テ菩提ヲ
證スルニ・サマタケナシ・不可思議
ノ功能アリ・[illegible]字ハ・自在不
可得ノ義ナリ・一切ノ事ニヲイテ・
自在ヲウルコト・不可思議ナリ・
天尊ノ神力自在ニシテ・威德
ヲ・マシタマヘルコトハ・此ノ真言ノ
功力ナリ・此ノ第三重ノ時ハ・普
門ノ一德ヲアラハシテ・寶珠ノ

└14オ

└15ウ

功能ヲ以テ・一切衆生ヲ化シ
タマヘル・等流法身義也・第四
重ニハ・本地大聖ノ・往因ヲアラ
ハシテ・還テ上求菩提ノ義ヲ
示ス・寶珠ノ形ハ・聖財世寶ヲ
施テ・本地垂迹ノ悲願ヲ
顯ス・真言ハ・心中心咒ナリ・
・念誦法 羅什譯 云ク・若有下四衆求
福上者・誦二一千八百返一・随二心一成就 文
此ノ統化自在ノ印ハ・盤法ノ惣
印ナリ・天盤ト云ハ・天門ヲ
スヘタリ・人盤ト云ハ・人間ノコ
トヲコメタリ・地盤ト云ハ・地儀
ヲオサメタリ・天地人盤ノ中ニ・
一物トシテ・モル、物アルヘカラズ・
是レ如意寶珠ノ・所一成スカ
タ・万物攝在ノ惣躰ナリ・
輪王灌頂ノ分齊ニハ・此ヲ以テ
至極トスルナリ
輪王ハ必ス七寶ヲ具セリ
一ハ輪寶・二ハ象々・三ハ馬々・四ハ
珠々・五ハ女々・六ハ主蔵神々・七ハ
主兵神寶ナリ・珠寶ト云ハ・
如意寶珠ナリ・七寶ノ中ニ・
珠寶ハ能生タリ・自余ノ六
寶ハ・珠寶ヨリ生スヘキカ故
也・當時ノ小國ノ帝王ハ・只此ノ

└16オ

└17オ

└17ウ

└18オ

印ヲ結ハ、・分ニ七寶ノ威
德ヲ具スヘキナリ・但シ珠
寶ハ・公家ニアリ・此ノ印
真言ノ・功力ニ依テ・自然ニ出
来歟
凡ソ世間ノ悉地ヲ祈ラムニハ・只
此ノ一法ニアルヘシ・寶珠ノ表
示スルトコロ・何ノ事カ・心ニマカ
セサラム・如意珠ノ名言・ソノ
義・タヤスク知ヌヘシ・又此ノ法ノ
功能ニ云ク
・極大秘密陀羅尼法云・閻浮提・
濁一世末代衆生・現一身現一在一難一改二
其報一者・若有二改一悔一心一者・依二此甚一
深法一・發二菩一提一心一・須一臾修一行之一
者・年一内・月一内・日一内・随二彼一々信一
力厚一薄一・一一々可一成一就之一 文
・又云・文殊師利・為二化一悪一趣一・現二種一々
身一・一一切野一干一上一首・皆一是文殊
化一身・若有二浄一信一・歸一依文殊之
輩・習二此秘一法一・夜半施二食野一干
類一・七一日若三七日・早得二報一・所一
住家内・自一然涌一出・無一量福一德一 云 々
此ノ法ヲ修行スル事ヲハ・殊ニ隠密
スルナリ・本文ヲ信スヘシ
・極大秘密陀羅尼法云・修二行
此法一者・縦一雖二妻一子一・惣一不二可一令二

└19オ

└19ウ

└20オ

知ム・況イハムヤ他ー人乎ヲ・若シ顕ー露ニ行ニ此ー
者ハ・還カヘテ其ノ人ヒト・蒙ル不ー詳アキラカニセー・秘ヒソカニ密シテ行ヒ
行ヒ之ノ者ハ・得ルコトヲ証ニ・无シ疑ウタガヒ文・
・問ト密教ノ習ハ・深ク秘スヘキ
条ハ・何ノ法モオナシカルヘシ・此ノ
法・アナカチニ・秘スヘキヨシアリ・
若シソノ故アリヤ・又アラハニ
オコナヘハ・還テ不詳ヲ・カウフ
ルヘキ義如何
・答・凡ソ秘術ノ習ハ・アラハニ
モテナセハ・ソノシルシナシ・此ノ
法ハ・秘術ノ中ノ秘術ナリ・
貧報ヲ轉シテ福貴ヲウル
カ故ニ・秘法ノ中ノ秘法ナリ・輪
王灌頂ノ重法ナルカ故ニ・就中
此ノ法ハ是レ・如意寶珠ノ
功能ヲアラハシテ・天尊ノ悲
願ヲシメシタマヘリ・如意寶
珠ヲハ・ミツカラ見テ・他人ニシ
メスコトク也・他人ニシメセハ・神
變ヲウシナフテ・自在ナラサル
ナリ・若シ寶珠ニナスラヘテ
此ノ法ヲ存セハ・アラハニオチ
ナシタテマツラハ・天尊ノ神力ヲ
ウシナヒタテマツルヘキカ故ニ・不
詳ヲ・カウフルヘキイマシメ・尤
ソノ謂アリ

└22ウ

・不フ空クウ羂ケンサク索ク経ケイ寶ホウ思シ惟ユイ譯ヤク云ウ
咒シユ人ニ得ミナトク・此如シカヤウ意ノ寶タカラ珠タマ・所シユ須ス
皆ミナ遂トク・利リ益ヤク・無ナシ量ノ諸ノ衆シユ生ウ
類ルイ・皆ミナ令シム快ケ樂ラク富フ貴キ自ジ在ザイ・
咒シユ人ニ復マタ以テ種ノ々ノ香カ花ハナ・供ク養ヤウシテ
寶タカラ珠タマ・唯タダ應ベキ自ジ見ケン・勿ナカレ示シメスコト他タ人ヒト・若モシ示シメセバ他ヒト・珠タマ即チ失ウシナヒ神カミ變ヘン・
復マタ不ス自ジ在ザイ文ブン

└21オ

此ノ経文ニツイテ・寶珠ノコト
ヲ思ヘハ・今ノ法ノ子細コマヤカニロエ
ラル、者也・又世間ノ不思議
ヲ以テ・法門ノ道理ヲ案スルニ・
ソノ理ヲシラサレトモ・眼前ニ不
思議アリ・物ヲソムル時キ・妊ニン
者シヤニ此ヲミセツレハ・ソノイロソマ
ラズ・咒シユ法ホウノコト・此コレラニテモシルヘ
キオヤ
・問モン 此ノ法ヲナラヒタル時キ・師シ
布施ヲサ、ケ・浄衣ヲ着セシ
ムト云ウ々・若シ本文アリヤ
・答トウ 別ベツ行ギヤウ儀キ軌ク云ウ・奉ホウ仕シ投ナケ財ザイ
寶タカラ・傳ツタヘ法ホウ時キ・必ヒツ以モテ千セン金キン・可シ置オキ
敷シキ法ホウ教キヤウ下ケ・又マタ設モウケ浄ジヤウ衣エ・可シ四ヨン奉ブ
着キ師シ・然シカシテ後ノチ可シ傳ツタヘ受ウケ・不ズ尓シカラ者ハ・悉ツクシ

└24ウ

地チ・不ズ成ジヤウ就シユ无ムシ其ノ霊レイ驗ゲン文ブン
大ダイ日ニチ経キヤウ疏ソ・傳ツタヘ灌カン頂チヤウノ時キ・
布施ヲ用ルコトヲ釋スルニハ・

└22ウ

受ジユ者シヤヲシテ・浄ジヤウ信シン ヲオコサシ
メムカ為ナリ・法ホウヲモウスレハ・
悉ツクシ地チ アラハルヘキカ故ナリト云ウヘリ
・問モン 傳ツタヘ受ウケ ノ時キ・千セン金キン等ラ ノ
寶タカラヲナケストモ・法ホウノ肝カン心シン・大
事ジ等ラヲツタヘテ・修シユ行ギヤウセムニ・
何ナニ ッ悉ツクシ地チ ナカラムヤ・又マタ貧ヒン
道ノ者モノ・為タメニ・大ダイ日ニチ如ニヨ来ライ・ハルカニ
濁ジヨク世セ末マツ代ダイヲハレムテ・此コノ化ケ
義ギヲマウケタマヘリ・清セイ貧ヒン ノ
輩トモガラ・千セン金キン モツヘカラサルカ故ニ・
此コノ法ホウヲツタヘカタシ・若モシ然シカラ者ハ
彼カノ化ケ儀ギノ本ホン意イニ・タカフヘ
キニヤ如ニヨ何カ
・答トウ 此コノ法ホウハ・佛ブツ法ホウノ如ニヨ意イ寶タカラ
珠タマナリ・世セ間ケン ノ寶タカラ珠タマ・ナヲ以モテ
價アタイ直ネ・三サン千セン大ダイ千セン世セ界カイ説セツ ケ
リ・イハムヤ仏ブツ法ホウ甚ジン深ジン ノ寶タカラ
珠タマヲヤ・此コノ法ホウノ躰タイ・ステニ是ヨ
寶タカラ珠タマナリ・天尊ノ本ホン誓セイ ノス
カタナルカ故ニ・若モシ本ホン説セツヲ

└26ウ

ソムイテ・布施ホドコシ等ラヲモチ
キスハ・ステニコレ・法ホウヲカロク
スルカ故ニ・天尊ノ聖セイ意イニ・カナ
フヘカラサルカ故ニ・悉ツクシ地チ ナカルヘ
キ欺アザム・又マタ貧ヒン道ノ輩トモガラハ・千セン
金キン誠マコトニモツヘカラズ・千セン金キン布

└27オ

施ハ・普通ニモアリカタカルヘシ・
教文ノヲキテハ・随分ノ千金也・
福貴ノ人ノ・千金ノ施ニ准
シテ・ソノ志ヲ表スヘキナリ・
彼ノ貧女カ一燈ハ・ソノ志フカ
カリシカ故ニ・釋尊コトニ・納受
シタマヘリ・力ノタフルトコロ・
千金ノ義ナルヘキナリ・有徳
ノ人モ・千金ハタヤスカルヘカ
ラズ・ソノ身ノ分齊ニ随テ・
千金ノホトナルヘキニヤ・故ニ
念誦法羅什譯云若此秘密
法ハ・随テ力ニ・无レ布施者ハ・无シ験ケム文
彼ノ儀軌ノ文・此ノ念誦法ノ
文ニ・ナスラヘテ・コトロフヘキ
ニヤ
・問　此ノ天尊ノ法ヲ修シテ證
利ニアツカラム人ハ・成仏ノ因ト
ナルヘシヤ
・答　此ノ法ヲ修セム人・ソノ證
ヲエテ・此ノ一門ニヨテ・本尊
ヲミタテマツラム時キ・自然ニ
又普門法界ノ・無量ノ聖衆ヲ
ミタテマツルヘキナリ・此ノ意ロ・
大日経疏ノ第四ニミエタリ・ソ
ノ文・カノ折紙ニノセタリ・此ヲ
ミルヘシ

└28ウ

└29オ

・問　此ノ法・何ナル因縁アリテカ・
濁世末代ニ・悉地タチマチニア
ラハレ・又神力自在ナルヤ
・答　此ニ惣別ノ因縁アリ・
惣ノ因縁ト云ハ・普門方便・神
力自在ノ・大日如来・アキラカニ・
末世ノアリサマヲ・カヽミテ・
薄福貧窮ノ衆生ヲタヅ
ケムカ為ニ・此ノ頓成悉地ノ三
摩地ニイテヽ・此ノ等流法
身ヲ・現シタマヘリ・是則
大日如来ノ・普門方便・不可思
議ノ・神變加持ノ・化儀ナルカ
故也・　別ノ因縁ト云ハ・𑖀字ノ
功能ニアリ・子細サキニシル
セリ・福貴ヲエサルコトハ
悪業ノサマタケナリ・此ノ
字ノ功能ニ・因業ノコトハリ・
不思議ノ功力アリ・悪業
アレトモ・福果ヲサマタケス・
小因ヲ以テ・大果ヲ得ルナリ・
又染浄不二ノ・道理ヲ具シテ・
煩悩菩提ヘタテナシ・又自
在不可得ノ義ヲ・ソナヘタ
ルカ故ニ・頓成悉地ノ徳アリ
此ハ種子真言ニ付テ・ソナフ
ル所ノ功能ナリ・次ニ三昧耶

└29ウ

└30オ

└30ウ

└31オ

形ノ寶珠ニ付テ・殊ニ頓成
悉地ノ功能アリ・釋迦如来
ノ・仁王般若ヲ・説ヘルコトハ・末
世濁悪ノコロ・王法ヤウヤクオ
トロヘテ・ソノ威徳ナカム時キ・
七難ヲ滅シテ・七福ヲ生セシ
メムカ為ナリ・此ノ経ヲハ・如意
寶珠ニ・ナスラヘラレタリ・彼ノ
統化自在ノ印ハ・スナハチ寶
珠ノ形ヲ表示セリ・又天
尊ノ心法モ・ソノスカタ・寶珠
ナリ・件ノ印ニ用ル所ノ・心中

└32ウ

〔付箋〕
〔統化自在印明事
初重二重両度印時可用何明哉／第三重印説
文ニウテヲ交云々其形／如何又合掌寶形ト云
リ何合掌事／哉其形如何第四重印説文不見／
何様可結哉心中心咒ト云ハ何咒／事哉〕

心咒ト云ハ・スナハチ是モ・寶
珠ノ功徳ナルヘシ・寶珠ニ万
徳ヲソナヘタリ・何ノ功徳カ
此ニモレムヤ・寶珠ト云ハ・ミ
ナモト・𑖀字門ノ功徳ナリ
𑖀字門ト云ハ・衆生本有ノ
心性ナリ・凡夫ノ心ノ思フ
所・ナヲ以テ須臾ニ・遠所ノ
事ヲ思ヒ・速疾ニ万事ヲ

└33オ

└31ウ

弁フ・聖位轉勝ノ寶珠
ナルカ故ニ・頓成悉地ノ条ヲハ
更ニ以テウタカフヘカラサル者也・
（白丁）　└34オ

・金剛縛印
此印ヲハ・或ハ月輪ノ印ト名ケ・
或ハ浄菩提心ノ印ト稱シ・
或ハ如意珠ノ印ト号ス
大日ノ智徳・諸仏ノ通印ナリ・
・問　此ノ一印ニ・三ノ名アルコト
如何
・答　カノ三ノ名ハ・一一法ノ上ニア
リ・ソノ意・建立護摩儀
軌ニミエタリ・ソノ文ハ・折紙ニ
ノセタリ・此ヲミルヘシ
・問金剛縛ト云ハ・ウチマカセテ
ハ・十指外縛ノ印ナリ・十指
外縛ノ印ヲ・何ヲ月輪ノ印ニ用ル
ヤ
・答　十指外縛スルヲ・満月ヲ
ナスト云ヘルコト・文殊ノ儀軌ニ
ミエタリ・彼ノ折紙ニノセタリ・
月輪ト云ハ・是レ佛心ノ形チ
ナリ・故ニ菩提心論ニ云ク・仏一
心如ニ満一月一ト云ヘリ・又攝真
實経ニ云ク・毗盧遮那仏心
為ニ金剛縛形一ト云ヘリ・カレ

└33ウ
└34ウ
└35オ
└35ウ
└36オ

コレノ文ノコヽロ・金剛縛ノ印ヲ
月輪ノ印ト名ルニ・尤ソノ謂
アルヲヤ・但シソノ表示ハ・仏一心
ト云ハ・十波羅密等ノ・無
量ノ万徳ヲ・ソナヘタマヘリ・ソ
ノ功徳ノ・ホカニアラハルヽヲ・仏ト
号ス・十指外縛スルハ・スナハチ
十波羅密・ホカニアラハルヽ
義ナリ・此ハ果徳ニ付テ・習フ
方ナリ・又因分ニ付テ云ハヽ・
一切衆生ニ・皆コト〳〵ク三魂
七魄アリ・成佛ノ時キハ・轉
心月輪トナル・因位ノ三魂モ
心ノカタチハツホミタル蓮花
ノ如クニシテ・八分アリ・是レ
八分ノ肉段ト云フ・男ニハ上ニ
ムカヒテアリ・女ニハ下ニムケ
リ・此ノ蓮花ヲ観シテ・開
敷セシメテ・八葉ノ白蓮花
トナスナリト云ヘリ・ソノ八
分ノ肉段ト云ハ・是レ八識ノ
スカタナリ・八識ト云ハ・六識ハツ
ネノ如シ・第七ニハ・阿陀那識・第
八ニハ阿頼耶識ナリ・此ノ第
八識ヲハ・蔵識ト云ナリ・一切ノ
諸法・コノ中ニオサメタリ・故ニ
蔵識ト云フ・七魄ト云ハ・七識ナ

└36ウ
└37オ
└37ウ
└38オ
└38ウ

リ・第八識ヲ三ニワカテ・三魂
トハ云ナリ・是ノ故ニ・八分ノ肉
段ト云ハ・スナハチコレ・三魂七
魄ノスカタナリ・此ノ三魂ヲ
ハ・三因佛性ニアツ・三因佛
性ト云ハ・一ハ正因佛性・二ハ了
因仏性・三ハ縁因仏性ナリ・
此ノ八分ノ肉段ノヒラケタルスカ
タハ・胎蔵ノ八葉ナリ・第
九ニ・菴摩羅識ヲタツ・コレ
中臺ノクラヰナリ・凡ソ
真言宗ニハ・無量識アリ
・問　此ノ縛印ニハ・何ノ真言ヲ
用ルヤ
・答　**丸**字ノ一字ヲ用ルナリ・
先ツ縛印ヲ結テ・ムネニアテ、
次ニ身中ニ・**丸**字ヲ観スル也・
彼ノ八分ノ肉段ヲ・八葉ノ白
蓮花ニ観シナシテ・ソノ上ニ・
金色ノ**丸**字ヲ観ス・ソノ
**丸**字ヨリ・白色ノ光ヲ放・
是レ円明ノ月輪ナリ
ソノ時ニ行者・モトヨリ具
縛ノ凡夫ナルカ故ニ・煩悩具
足ノ身ナリ・シカレトモ・観
念スル所ノ・**丸**字真實ノ
慧心ト・煩悩染欲ノ心ト・ア

└39オ
└39ウ
└40オ
└40ウ

ヒ和合シテ・スナハチ真妄　└41オ
一味ナリ・然　後ニ𑖀字ヲ
トナフ・手ニ縛印ヲムスフハ・
是レ身密ナリ・口ニ𑖀ヲ
誦スルハ・是レ語密ナリ・意ニ
観念スルハ・是レ意密ナリ・
此ノ三密相應スレハ・貪瞋
痴ノ・果徳ニアラハル、義ナリ・
佛心ハ万徳ヲソナヘテ・円満
セルカ故ニ・月輪ノ円満セル
カ如シ・又煩悩ノ雲ヲハラヒテ
清浄明白ナルコト・月輪ニ
ニタルナリ
・問　件ノ印ヲ・又何ッ浄菩
提心ノ印ト名ルヤ
・答　菩提ト云ハ・天竺ノコト
ハナリ・唐土ニハ覺ト翻・サ
トルト云義・スナハチ佛果ヲ
菩提ト云ナリ・佛ハ一切ノ
□法ヲ・サトリタマヘルカ故
也・佛果コレ清浄ナレハ・浄
菩提ト云ナリ・故ニ佛心
ノ印ナルニヨテ・浄菩提
心ノ印ト云ナリ
・問　如意珠ノ印ト号スルコト
如何
・答　佛心ハ・化用自在ニシテ・

└42ウ

└43オ

神變難思ナルコト・如意
寶珠ノ如シ・仍チ佛心ノ
印ヲ以テ・如意珠ノ印ト号
□ル・ソノ理アキラカナリ
・問　金剛縛ト云□・□□シ外縛
カキルカ如何
・答　金剛縛ト云ハ・ウチマカ
セテハ・外縛ヲ云フナリ・但シ
内縛ニモ通スヘキニヤ・ホ、
ソノ證アリ・彼ノ文ハ・折
紙ニノセタリ・果徳ノ諸ノ
功徳法門・ホカニ顕カ故ニ・因
位ノ三魂七魄・ウチニカク
レタリ・因果不二ノ義・コノ
一印ニアラハスナリ
・問　顕教ノ心ハ・心法ハイロカタ
チナシ・密教ニハ・ソノイロカ
タチアリト云ヘリ・カノ三魂
七魄ハ・一切衆生ノタマシヒ
ナリ・身中ニアルスカタ
如何
・答　善無畏三蔵ノ譯シ
タマヘル・破地獄ノ儀軌ト云フ・
至極甚深ノ秘書アリ・
彼ノ書ノ意ノ云ク・衆生ノ
身ノ中ニ・汗栗駄心アリ・
汗栗駄ト云ハ・梵語ナリ

└41ウ

└42オ

└43ウ

└44オ

└44ウ

└45オ

唐土ニハ・真實心ト云フ・件ノ
癡等ノ煩悩・自然ニ断浄セラ
レ・五智・四種法身等ノ功徳・
ヤウヤク證得スヘシ・薫修
日カサナラハ・現身ニモ佛果ヲ
アラハシツヘシ・大日経ノ疏ノ第十
五ニ云ク・𑖀字門ハ・一切如来・昔
因ニ此門ニ・而　成ニ正覺ニ・無ニ有ニ異ー
路ニト云ヘリ・常ニ此ノ印ニ
住シテ・カクノ如ク観スヘキ
ナリ・又文ノ如ク此ヲノル
・大日経疏第十七云・布ニ𑖀字ニ法・
先観ニ其心ニ・八葉開ニ敷・置ニ𑖀
字於其上ニ・此𑖀字・即有ニ
円ニ明之照ニ也・時行者・染欲
之心・与ニ真實慧心ニ・而相和ー
合ニ・即同ニ真ニ・而共一味也・如
是ニ観者・即ニ是如来・
・同第十四云・於ニ𑖀ニ作ニ其黄ニ色ニ
所謂・金剛之色也文・
・問　𑖀字ハ黄色ニテ・光ハ白
色ナルコト・ソノ故アリヤ如何
・答　𑖀字ハ・本有ノ理性ナリ・
六道四生ノ身ニアレトモ・ソノ
イロカハルヘカラス・金ハ泥等ノ
中ニアレトモ・ソノイロカハラス・
故ニ理性ノ𑖀字・金色ナル

└45ウ

└46オ

└46ウ

└47オ

└47ウ

ナリ・是ノ故ニ・胎蔵界ノ
理法身ノ大日ハ・金色也・ソ
ノ光ノ白色ナルコトハ・智ノ
イロヲ表スルナリ・智ハ浄
菩提心ナルカ故ニ・白浄ノ
イロナルヘシ・故ニ金剛界ノ
大日ハ・白肉色ナルナリ・
理ヨリ智ヲ出生スルカ故ニ・
𑖀字ノ理性ヨリ・智光
ヲ出生スルヲ・月輪トモ
云ヒ・如意珠トモ云ナリ・

・非内非外印・𑖀或ハ𑖀或南无阿弥陀佛
此ノ印ハ・九識ニ付テ・理智
不二ノ義ヲ表シ・因果唯一
一ノ意ヲアラハスナリ・二大
指ヲハ・アヒナラヘテ・第九識
ヲ表ス・是レ両部ノ大日ヲ
・合テ・第九識ニアテ、・理
智不二ヲ表スルナリ・密教ノ
源底・タ、此ノ印ニアリ・此ノ
印ヲ以テ・阿弥陀ノ最極秘
印ト云テ・臨終ノ印ニ用ル
事ハ・阿弥陀ハ・蓮花部
ノ主・蓮花部ヲハ・又法
部ト名ク・顕密ノ諸法ハ・
法部ヨリ流出スルカ故ニ・両

└48オ

└48ウ

部ノ大教ヨリ始テ・一切ノ
佛法ハ・ミナ悉ク・阿弥陀如
来・三摩地法門也・阿弥
陀如来ノ・功徳法門ヲハ・惣テ
蓮花三昧ト名ク・故ニ三昧
耶形ニ・蓮花ヲ用ル・蓮花ノ
自性モトヨリ清浄ニシテ・淤泥ノケカラハシキ□□ノ中ニ
アリナカラ・スヘテケカル、コ
トナキナリ・三昧耶ト云ハ
天竺ノ詞ナリ・唐土ニハ本
誓ト云フ・然則・本誓ノ
スカタヲ・三昧耶形トハ云
ナリ・種子ハ𑖀字ノ・字ナリ・
ソノ功能・又コノ義ナリ・
故ニ阿弥陀ヲハ・得自性清
浄法性如来ト・ナツケタテマ
ツル・是レ秘密ノ名号ナル
カ故□・タ、シ密教□中ニア
テ功能ヲ説テ云ク・世間ノ
一切ノ慾・キヨキカ故ニ・一切ノ瞋
モキヨキ也・一切ノ煩悩・キヨキ
カ故ニ・一切ノツミモキヨキ也・一切
ノ法・キヨキカ故ニ・一切有情
モキヨキ也・一切智々・キヨキ
カ故ニ・般若波羅密多モ
キヨキナリ・阿弥陀如来ノ

└50オ

└50ウ

功徳法門ニ入レハ・此ノ四
種ノ清浄ヲウルナリ・此ノ
四種ノ清浄ヲエツレハ・二根
交會シテ・雑染□成スルモ
スナハチ佛事ヲナスナリト
云ヘリ・此ノ文ヲハ・返々モ秘ス
ヘシ・阿弥陀如来ノ・大慈大
悲ノ・濁世末代ノ・衆生ヲ
アハレミテ・此ノ本誓悲願ヲ・
アラハシタマヘルナリ・ユメ、人ニ
シラシムヘカラズ・ヨク〳〵秘ス
ヘキナリ・女犯ヲハ・一切ノ佛・
返々イマシメタマヘリ・妄心ノ
ミナモトニシテ・輪廻生死
ノ・キツナト・ナルカ故ナリ・凡
夫ノ愛着ハ・モハラ女境ニ
ヨリ・愛欲ノ執着ニヨリ
テ・三悪道ニハオツルナリ・阿
弥陀如来モ・返々イマシメオ
ホシメセトモ・ソノ事ヲ
カサム衆生ヲハ・何ノ佛モス
テタマフヘキカ故ニ・阿弥陀
一佛ノミ・ワカ法門ニヒキ入
テ・此ヲ佛道ニイレ・真言
一字ノミ・輪円具足ノ・道
理ニナスラヘテ・ヒソカニ佛事
ト云フ・ソノフカキ心ヲ・シラサ

└52ウ

└53オ

└53ウ

└54オ

ラム輩ハ・還テ謗法ノ罪ヲ　└54ウ
□スムツヘシ・ユメ〳〵ヨク〳〵・此ヲ
秘スヘシ・アナカシコ〳〵・輪円
具足ノ道理ト云ハ・輪ト云ハ・
輪廻生死ノ妄染ナリ・円ト
云ハ・円寂涅槃ノ功徳ナリ・
密教ノ習ハ・此ノ染浄二法
丸字門ノ一理ニアリ・阿弥
陀ノ・蓮花三昧ノ法門ト云ハ・
委クソノ道理ヲアラハシテ・
ネムコロニ末法万年ノ・ワレラ
ニカウフラシメタマヘルナリ・三
箇ノ縛印ハ・ソノ表示ナリ・　└55ウ
外縛ノ印ハ・智ヲムネトシテ・
オモテニアラハシ・理ヲカ
ネタリ・内縛ノ印ハ・理ヲ
アラハシテ・智ヲカネタリ・
非内非外ノ印ハ・理モ智モ
ヒトシクアラハス・此ノフカキ
心ヲエツレハ・イツレモ浅深
アルヘカラズ・心ニマカセテ
モツキルヘシ・丸ノ一字ノ内ニ・
顕密ノ教法ヨリ始テ・外
典等ニイタルマテ・一ツモモル、
コトナク・ミナ悉クコモレリ・　└56ウ
又縛印ノ内ニ・一切ノ密
印・ミナ悉クコレアリ・

又寶珠ニ・一門普門ノ　└59オ
二種アリ・一門ノ寶珠ト
云ハ・別尊ノ三昧耶形・ス
ナハチ彼ノ尊ノ表示等
ナリ・ソノ本誓ニ付テ・神　└57オ
力自在ナリ・普門ノ寶
珠ト云ハ・此ニ又三ツアリ・一ハ
理法身ノ寶珠・スナハチ
胎蔵ノ大日ノ・心月輪ナリ・
二ハ智法身ノ寶珠・スナ
ハチ金界ノ大日ノ・心月輪　└57ウ
ナリ・三ハ理智円満ノ
寶珠・スナハチ阿弥陀如
来蓮花三昧・輪円具
足・自性清浄・光明遍　└58オ
照・浄菩提心ノ寶珠也・
若シ人・此ノ一法ヲサトレハ・
スナハチ一切ノ法ヲ知ル・功
能ヲ云ヘシ・此ノ一行ヲ
修スレハ・スナハチ万行ヲ
具足シ・万徳ヲ円満ス・
現當ノ悉地・タヽ此ノ一
法ニアリ・筆ヲソメテ　└58ウ
紙ニアラハスコト・聖意ニモ
ソムキ・密教ニモ違セリ・
更ニ他見ヲヘタテヽ・ヤカル
ヘキナリアナカシコ〳〵

└裏表紙

9